

どこからが滑稽俳句ですか 山頭火の場合（一）

有富洋二

種田山頭火翁、私はあなたの生家の近くに生まれました。瀬戸内沿いの鉄道の駅ひとつ隣り、十キロメートル程離れたところでは、種田家は大地主で、駅までの八五〇メートルを、他人の土地を通らずに行けるのも自慢のひとつでしたよね。その家運も傾き、そして一発奮起し、元村役場の助役だった父上と挑んだ酒造所経営の場所は、私の実家とますます近所になりました。

月日は流れ、周りには、種田家の親族も居る私は、今日まであまり考えたこともない翁のことで、ふと思いついたのです。自由律俳句、とくに山頭火俳句と滑稽俳句の関連性はどうなのか！ ということ。そもそもこの思い付きは適正なものなのか。

俳句は、古今集に在る誹諧歌、室町時代の『竹馬狂吟集』の誹諧連歌などを源流に、江戸時代の貞門、談林派などの偉大な指導を経て、芭蕉の手でブラッシュアップされました。更に子規の才覚により、近代の要請に応えながら方向づけられ、今日、脈々とたくさんの俳人が守り、詠み続けているものですね。外面は、定型、自由律とそれぞれの様相でも、内在する核心は、びくともしていません。そしてその核心の構成物のひとつが、滑稽です。

と、こう考え及べば山頭火の滑稽俳句は、あり得るのです。ね！

雲がいそいでよい月にする

何が何やらみんな咲いてゐる

酒造業もやがて立ち行かなくなった山頭火は妻子を伴い句友の居る熊本へ。その後、戸籍上離婚して東京へ。また熊本に舞い戻り曹洞宗の寺で出家得度の後、行乞流転を繰り返し、それは吟行そのもの。

陽を吸ふ

石ころを蹴とばして枯山

俳句は短詩ですから、芭蕉の言うとおりの「いひおほせて何かある」ということが大事です。受け取り方に、解釈の可能性のあることを望まれます。言い尽くしては、詩にならないということ。俳句の前に対峙した読み手の読み方は自由です。それぞれの読者に自由に正解、真意を考える作業をさせるようなものが、待望される俳句です。

そう言っても山頭火の俳句は、目の前で見、感じたことを、素直に言葉にして置いていきます。その分、読み手の共感はやすいけれど、滑稽俳句としての読みには、一定の距離があります。句意を巡って、堂々巡りをしてゆきます。山頭火の、自分を持て余した末の、その感情のほとばしるままに生まれる俳句の底に、滑稽を見出すことができます。

笠に蜻蛉をとまらせて歩く

からむものがない蔓草の枯れてゐる

山頭火が一躍有名になったのは、戦後二十数年後ですから、いまやすでに半世紀は過ぎています。当時のブームに貢献した要因のひとつは、「層雲」の山頭火の活躍に私淑していた句友の撮った、一笠一鉢一杖の雲水姿の例のキャッチーな写真の一枚でしょう。昭和八年、山頭火、五十一歳の姿です。うしろすがたにしぐれても、ユニークな放浪者の人生はまだまだ続いてゆきます。